

Y2-23

若手整形外科医師による臨床研修医教育の成果

名古屋第二赤十字病院 整形外科
深谷 泰士、佐藤 公治

【はじめに】当院は急性期救命救急病院であり年間を通じて多数の多発外傷患者が搬入されるため、多発外傷の研修医教育は非常に重要である。当科では独自の構想に基づき、2010年1月より3月までの間、研修医に対し、若手整形外科医が始業前の早朝に講義形式の研修医教育を自発的に行ってきた。今回、研修医に対しアンケートを施行しその成果を検討したので報告する。

【対象および方法】対象は当院1年次臨床研修医20名（男性13名、女性7名）である。講義形態は、平日の朝7時からの30分間の講義であり、整形外科若手医師の独自のアイデアにて講義を行った。講義内容は四肢外傷総論（1回）・四肢脊椎の画像読影の仕方（上肢・下肢・脊椎各1回、計3回）よく遭遇する四肢脊椎外傷（上肢・下肢・脊椎各1回、計3回）救急外来で見逃された症例のレビュー（1回）の計8回の講義とした。全8回終了後、アンケート調査を行いその結果を集計した。アンケート内容は1. 将来の志望診療科、2. 出席回数、3. 興味深かった講義、4. 出席できなかった理由、5. 今後も継続を希望するかどうかであった。

【結果】回答率は20名中15名（75%）であり、将来の志望科は内科系9名（60%）、外科系4名（26.7%）であった。出席回数は平均3.7回で、8回、7回がそれぞれ1名ずつ、6回が2名であった。15名中、2名が1度も出席したことがないと回答した。また、総論や実践的な内容の講義が好まれる傾向にあった。出席できなかった理由として、早朝にも関わらずローテーション中の科での業務時間中であったという意見が15名中12名に（80%）にみられた。また、回答した15名全員が今後の継続を望んでいることが明らかになった。

【結語】当科若手医師による自発的な研修医教育は好意的に捉えられており、研修医全員が今後も研修医教育の継続希望していることが判明した。

Y2-24

初期臨床研修施設選択に対する医学生の特徴

芳賀赤十字病院 教育研修推進室
宮下 淳、古口 裕理、山崎 義則、
木村 由美、菊島 裕子、塩野谷晃江、
林 堅二、村上 善昭、稲沢 正士、
岡田 真樹

【はじめに】平成16年度、医師の臨床研修制度の義務化に伴い、医師の地域偏在化は深刻な問題となっている。その打開となる一手段として地域における研修医の確保および教育は必要不可欠である。そこで、今回、研修医確保の一資料とするため初期研修に対する医学生のニーズおよび施設選択行動の特徴を調査したので報告する。

【目的】初期研修施設選択に対する医学生のニーズ、及び研修施設選択の特徴を明らかにする。

【方法】平成16年度以降の初期研修を経験した研修医および医師を対象に半構成的面接をおこなった。分析は逐語録を作成後、センテンス毎にコード化しKJ法の要領で分析。分析の視点は研修施設選択の際に考えた事、施設決定の決め手、研修病院に求めること、以上3点。

【結果】初期研修施設決定に至る経緯として、情報収集、施設選択、選択した施設の見学、施設決定という流れを経ている医学生が殆どであった。医学生は、集めた情報の中から〈施設の特色〉、〈研修の特色〉、〈研修場所〉、〈将来展望・進路〉を検討し自分の希望に沿った施設を選択肢に挙げていた。そして、選択肢に挙げた施設を実際に視察する事で、最終決定に至るが、研修施設を視察する際は、ある視点を持って検討していた。それは、〈施設環境〉、〈将来性〉、〈施設の研修方針〉であり、これらを決め手として最終的な施設決定に至っていた。次に、医学生は、研修施設に対し、〈診療能力の習得〉、〈教育体制〉、〈病院の方針〉を求めていることが明らかとなった。

【まとめ】医学生は、プライマリケアの技術習得を求め、そのために救急医療やCommon diseaseへの対応を含んだ、積極的な診療の参加が可能となる施設を望んでいた。